

ケアが紡ぐ人間関係と抵抗

— 『上海宝贝』再読

花 尻 奈緒子

三重大学人文学部文化学科『人文論叢』第41号 別刷

2024年3月 発行

ケアが紡ぐ人間関係と抵抗

——『上海寶貝』再読

花 尻 奈緒子

要旨：衛慧『上海寶貝』は1999年に中国で出版され国内外で流行した長篇小説である。この作品は、中国当代文学史においては商業主義文学およびポストフェミニズム的テキストの代表作とされ、また文体の審美性についてもしばしば消極的評価を下されてきた。また、近年では文学研究の領域で言及されることも少なくなっている。本稿は、これまであまり解読の対象とされてこなかった登場人物間の関係に着目して『上海寶貝』を再読し、近年日本国内の文学批評の領域で広がりを見せている「ケアの倫理」を切り口として、新たな読みの提示を試みた。

まず、作中で主人公が示し、かつ従来の評論がテキストの主旋律と目してきた「メリトクラシー—ポストフェミニズム—新自由主義」の世界観が、実際には主人公の現実と衝突しているだけでなく、主人公もその世界観に違和感を持っていることを明らかにした。さらに、主人公が作家であることや、しばしば示されるポストフェミニズム的態度が批評家に注目される一方で、主人公が担う比較的重いケア労働が見落とされてきたことを指摘した上で、主人公の「ケアの倫理」について検討した。その結果、「個」を称賛し自主独立の価値を重んじる世界観にありつつも、主人公およびその他の登場人物たちが織り成す交流の中では、頻繁に相互ケアリングの姿が描かれており、人間が生きる上で他者への依存が避けられない現実が示されているだけでなく、「メリトクラシー—ポストフェミニズム—新自由主義」の世界観への抵抗を読み取ることができると指摘した。『上海寶貝』において、都市部の華やかな生活と並行して描かれたこれらの人間模様こそが、むしろ当時の上海を活写しているといえるのではないか。

はじめに

衛慧『上海寶貝』は、1999年に春風文芸出版社から出版された長編小説である。当時、作家衛慧はすでに数作の短編集を出版してはいたが、『上海寶貝』の出版時にはそのセンセーショナルな内容とともに、宣伝のために付された「美女作家」との肩書きが大きな注目を集め、一躍有名作家となった。同作は、若き女性主人公 Coco が、性的に不能で精神的に脆い恋人天天と同棲しつつ、友人を介して出会ったドイツ人の既婚者男性マークと肉体関係を結び、最終的に彼ら両方を失うまでを、上海の国際的で華やかな都市生活を背景に描く、私小説に接近したフィクション小説である⁽¹⁾。センセーショナルとされたのは、女性の能動的な性衝動、自慰行為を含む性行為、違法薬物使用の描写などを赤裸々に描いた点であり、それらの要素が公序良俗に反するとして当局に問題視されたのち、2000年5月に出版元が自主回収するに至った。しかし、この「禁菸処分」が却って宣伝材料となり、国内では海賊版が多く流通したほか、国外50カ国以上で翻訳・出版されるに至ったという⁽²⁾。日本においては、2001年に桑島道夫訳の邦訳版『上海ベイビー』が文藝春秋社より出版され、文芸誌に作家インタビューや書評が多

く掲載されるなど、出版当時にはやはり話題となった。

衛慧は『上海宝贝』のほか、『像衛慧那樣瘋狂』（1999年）、『上海宝贝』の続編となる『我的禅』（2004年）のほか、『欲望手枪』（1998年）、『水中的処女』（2000年）など1998年から2000年代前半まで集中的に著作を発表したが、2007年の『狗爸爸』を最後に小説家としては筆を折っている。その後は心理カウンセラーの職に就き、セラピーに関連した著書があるという。『上海宝贝』は中国当代文学の中でも、名作と称されることがほとんどないばかりか、商業主義文学およびポストフェミニズム⁽³⁾的テクストの代表と名指され、むしろ消極的な評価を下されることの多い作品である。また、作者の衛慧自身がすでに作家業から引退していることもあり、近年では文学研究の領域において言及されることも少なくなっている。

本稿では、近年日本国内の文学研究領域においてしばしば応用される「ケア労働」および「ケアの倫理」の観点から、主人公の世界観および人間関係に焦点を当て、『上海宝贝』を再検討する。日本現代文学の領域においてはすでに、介護を描く小説を研究対象とした論集『〈介護小説〉の風景——高齢社会と文学』（米村みゆき・佐々木亜紀子編、森話社、2008年）、およびケアの担い手とケアを受ける人物を描く「ケア小説」の評論集『ケアを描く——育児と介護の現代小説』（佐々木亜紀子・光石亜由美・米村みゆき編、七月社、2019年）があり、ケアを介した人間関係に着目した文学批評がまとめられている。また、英文学者の小川公代が2021年以降『ケアの倫理とエンパワメント』（講談社・2021年）、『ケアする惑星』（講談社、2023年）、『世界文学をケアで読み解く』（朝日新聞出版、2023年）などケアをキーワードとした文学批評に関する著書が続けて発表するなど、今日新たな小説研究の切り口として「ケア」は広がりを見せつつあるといえる。無論、ケアの定義には幅があり、上記の文学批評が扱うケアの現場ならびにケアの状況も様々ではあるが、社会の近代化によって「私的領域」に押し込められ不可視化されてきたケアと、ケアが結ぶ人間関係に光を当てて「公的領域」にテクストの意義を反射させる批評は、「公的領域」に直射する意義を持たない、或いはそれしか持たないと見なされた作品を分析するにあたり、オルタナティブな軸として一定の有効性を持つだろう。とりわけ、「私的領域」を前景化した小説が続々と誕生した90年代以降の中国当代文学においては、ケアを切り口とする読解が新たな文学史的風景を拓く可能性もあるのではないだろうか。以上のような企図から、本稿ではまず、全篇が「私的領域」の描出で構成される『上海宝贝』を対象に、同作の新たな読みの提示を試みたい。

一、先行研究および評価

まずは、『上海宝贝』のあらすじを以下に説明する。

主人公である25歳の若い名門大卒女性Coco（本名は倪可）は、すでに小説集を出版した経験を持つ駆け出しの作家である。給仕として働いていたカフェで裕福な若者の天天と出会って恋に落ち、同棲を始めた後、Cocoは天天の勧めでカフェを辞職して、小説執筆に専念することになる。天天は子どもの頃に母親がスペインに出奔、父親も早くに亡くし、それをきっかけに失語症になって高校を退学した過去があるなど繊細で脆い精神の持ち主で、出奔した母親から多額の生活費を仕送りしてもらい、高等遊民的生活を送っている。また彼は性的不能者であり、Cocoが望む形の性交渉がかなわず、治療も試みるがうまく

いかない。ある時、Coco は共通の友人を介して上海駐在のドイツ人男性マークと出会う。性的に満たされない Coco は、恋人がいることも構わず誘いをかけてきたマークと秘密裏に肉体関係を結び逢瀬を重ねる。冬になり、天天は毎年恒例の一人旅に出る。上海に残された Coco は小説執筆に励む一方、クリスマス休暇で上海を訪れたマークの妻子と対面する機会が訪れるが、嫉妬は感じない。その後、旅行先でヘロイン依存症に陥った天天を Coco が上海に連れ帰る。天天が薬物依存治療施設に入所している間に、天天の母親がそれを知らぬまま上海に戻る。治療施設退所後天天は母親と対面するが、拒絶の態度をとり続ける。Coco の作家業復帰が目前に迫る一方、マークの帰国が決まり、Coco は天天に無断で外出しマークと数日間を過ごす。帰宅後ついに Coco がマークとの関係を告白すると、天天は再び薬物依存に陥る。Coco はマークとの最後の逢瀬に赴くが、その後すぐには天天のもとに帰る気力がなく、実家に身を寄せる。翌日帰宅した Coco は天天と一緒に外出して一日を幸せに過ごし、愛を再確認する。しかし、翌朝ベッドの上で息絶えた天天を発見する。

衛慧『上海宝贝』は、発表当時「新・新世代」を強烈に印象づける作品とされたが、女性文学の系譜の中に置けば、世代間の連続性はより明らかである。文化大革命終息後の思想解放状況の下、80年代以降の中国当代文学はかつての急進的かつ一元化された価値観を脱し、西洋モダニズムの影響を受けたとされる先鋒文学（前衛文学）や、伝統文化に根ざした小説を標榜した尋根（ルーツ）文学などに代表される、解放後最大の文学の多様化・価値の多元化時代が到来した。この頃、張潔、王安憶、鉄凝などの女性作家たちが、女性主人公の人生を通して、革命イデオロギーの中で見落とされてきた女性の生の苦悩、性差別などを主題とした作品を数多く生んだ。この中で、内面化された家父長制を突破し、女性自身が自主的に「女性の身体」を物語る道が拓かれてきたとされる⁽⁴⁾。

90年代には、先鋒文学作家の作風転向が目立つようになり、新歴史小説、新写実小説などの新たな潮流に加えて、「另類（オルタナティブ）小説」と呼ばれる非主流タイプの作品群が生まれた。中でも目立った潮流は、きわめて個人的な経験を語る、女性作家の自伝的小説である。陳染、林白、海男らに代表されるこれらの作品群は、先鋒文学の特徴である言語的実験の要素は薄れ、個人の情緒と作家の実体験を匂わせるプライベートな経験の描写に終始するものであり、共同体の理想や動向を主軸とし、集団の利益を目標とした個人の行動が描かれる解放以降の主流文学（左翼文学）と相対する形の創作であるとして「個人化写作（個人化創作）」または「私人化写作（プライベート化創作）」と称された。もう一つの重要な特徴は、これらの作品群に共通して書き込まれた、女性として生きる上で遭遇する様々な苦難や抑圧の風景である。当然これらは、80年代から張潔、王安憶、鉄凝ら女性作家が生み出してきた女性の人生をテーマとした作品群を、より個人的な経験に引き寄せて継承したものといえる。「個人化」にせよ「私人化」にせよ、そのスタイル自体に性の別はないはずであるが、通常、文学史の視座からこれらの作家たちに言及する際、女性のみが成員の場合の人称代名詞「她们（彼女たち）」が使用されることから分かるように、女性作家独特の潮流とされる。「個人化／私人化」が近代啓蒙主義知識人の立場から離れた／脱した創作スタンスであること以上に、個人の経験から掬い出された「女性意識」⁽⁵⁾や女性の身体的経験が、文学史上長いインターバルを経て再び叙事の中心に置かれたことが焦点化され、かつ90年代に中国で受容が広がったエレヌ・シ

クスの「エクリチュール・フェミニン」と結びつけられ⁽⁶⁾、ジェンダー化されるに至ったのだといえよう。「個人化／私人化写作」は同時期に中国国内で根付き始めたフェミニズム文学批評の恰好の対象ともなり、作中の「女性意識」が様々な角度から考察されてきた。

衛慧は、以上のような「個人化／私人化写作」の後の世代に位置づけられる女性文学といえる。実際、多くの文学史著作の中では「ポスト個人化／私人化写作」の現象として言及され、「另類小説」の内に含まれることも多い。また、女性の性欲の描写やきわめて個人的な日常の叙事など、確かに「個人化／私人化写作」に共通する点が多い。しかし、賛否両論あったとはいえあくまでも文学の一種として評価される「個人化／私人化写作」の作品群とは異なり、『上海宝贝』ほか衛慧の小説は、並んで挙げられることの多い棉棉『糖』などとともに、少なくとも主流の文学史においては文学として正面から評価されることが少ないばかりか、基本的には、商業化した出版界に「誘導」された、或いは自主的に商業主義の方向に進んだ創作であるとの、消極的評価が主流である。また、評価の高低を問わず、『上海宝贝』に対する評論において注目される要素はかなり限定されている。一つは「身体写作」と称される由来にもなった赤裸々な性描写、および女性の性衝動の描写である。ポストフェミニズム的主張を伴うこの性描写の検討においては、しばしば大衆の「のぞき見趣味」への迎合に成功した例とされる⁽⁷⁾、或いは作品の思想の欠如を指摘しつつ、注目されがちな性描写が淡泊で「パフォーマンス」のようであると評し、そもそも商業性を確保するためだけに性描写が必要だったのではないかと推測するケース⁽⁸⁾なども見られ、概ね批判的である。もう一つは「享楽主義的」な生活の描写である。パーティー、酒場、実名で挙げられる高級ブランドなど、頹廢的な歓楽の描写が、作家の青春時代と都市文化の反映と見られるほか⁽⁹⁾、主人公たちがサブカルチャーに浸る様子は、90年代中国の消費社会イデオロギーに応えた表層的な描写にすぎず、彼らが信奉するパンク・ロックのような反逆性はけっして具わっていない、と作家の現実批判精神の無さを批判する例もある⁽¹⁰⁾。このほか、国際都市・上海を背景として示される、性的不能者の東洋人男性・精力旺盛な西洋人（ドイツ人）男性という対称の構図も、しばしば批判的文脈において、コリアリズム的表現として分析されてもいる⁽¹¹⁾。

以上のような、商業性や現実批判精神の欠如などの指摘は、『上海宝贝』批判の主旋律といってよい。ただし、同様に現実批判精神についての議論があった「個人化／私人化写作」と大きく異なるのは、文体・文章の審美性までもが糾弾される点であろう。この点は日本における批評でも同様であり、邦訳版『上海ベイベー』出版時、作家のリーベ英雄による書評では「二十ページを読めば欲望に貫かれた文明劇にスリルを覚えるが、二百ページを読めばそのことのとめどない重複と、均質な語り口にやがて苛立ちを感じる。ポルノでなく、前衛小説でもない。上海の『当代』を写した『我』の風俗誌を、面白がりながらも、あの膨大な大陸からより大きな現代文学が現れてくるのを、つい渴望してしまう」⁽¹²⁾との評価を下している。また、徳間佳信「『上海宝贝』、あるいは自己愛の万華鏡」ではストレートに「一読、私に強い嫌悪感を引き起こした」とさえ述べられている。徳間はその嫌悪感の原因を解明するとして、作中の様々な描写や主人公と登場人物の人間関係の在り様を分析した上で、作品の随所に衛慧の自己愛的パーソナリティが表れており、「あまりにも単調なエクリチュール」であると酷評している⁽¹³⁾。積極的評価の代表例は、邦訳版の出版時に発表された張競による書評で「物質文明の肥大化に敏感に反応する若者の内面が皮膚感覚で捉えられ、生の不安は若さの矜持として描き出された」、「多彩なメタファーは作家の豊かな想像力と研ぎ澄まされた言語感覚の片鱗をうかがわせ

る」と新世代作家独特の文学性を認めている⁽¹⁴⁾が、これは稀なケースといえる。

以上のように、『上海寶貝』を論じる際には、発表当時は新鮮であった若い女性の奔放な性生活の描写や、外国人男性を含む三角関係にまつわるコロニアル性、消費社会化した現代上海における裕福な上海人の生活ぶりなど、作品の特色たる要素が集中的に考察の対象となることが分かる。その一方で、それらを剥ぎ取った上で残される、物語や登場人物間の人間関係については、管見の限りにおいてはほとんど分析されてこなかった。本稿では以下、ひとまず衛慧に知識人或いは芸術家としての自覚の有無を問うことはやめ、物語、とりわけ主人公 Coco と彼女をとりまく登場人物たちとの関係を解説したい。

二、主人公の世界観

まず、主人公である Coco のキャラクターとその世界観について考えたい。あらずじでも触れたように、Coco は上海の名門大学を卒業したエリート女性である。大学卒業後は大学教員である父親の手回しもあって雑誌記者の職に就き、新人作家として小説集も出版して一部で話題にもなっている。物語は、Coco が雑誌記者の仕事辞めた後、新作長編小説を書き上げるまでの期間、実家暮らしをしつつ、カフェで給仕の仕事をして糊口をしのいでいる状況から始まる。Coco が自身をどうとらえているのかは、小説の冒頭で「毎朝目覚めてすぐに、なにか人に注目されるようなすごいことをやれたらと考える」⁽¹⁵⁾、「私みたいな敏感でうぬぼれた女の子」⁽¹⁶⁾、「私は野心満々で精力旺盛で、世界をまるで芳しい香りをはなつかじられるのを待つフルーツであるかのように見ている」⁽¹⁷⁾と明解に説明される。また、自分は能力とバイタリティを持ち、それを生かすための環境に身を置いてもおり、後は自分だけで名声を手に入れられるといった、若者の全能感と楽観的な認識がテキストの端々に見て取れる。

このような Coco の世界観は、改革開放から 20 年経とうという頃、新自由主義的制度改革が進み、人民の間の経済格差拡大がすでに大きな問題となっていた中国において、いわゆる「勝ち組」側のそれである。物語に登場する Coco の友人たち——阿 Dick、朱砂、蜘蛛、飛苹果なども、それぞれ手に職を持ち安定した収入を得ているのであるが、文脈に関わりなく、彼らが紹介される際には必ず知性や才能を持っていることが明かされている。まず、カフェの同僚である蜘蛛の場合は「IQ150 にして復旦大学のコンピューター専攻課程を卒業できなかった。その原因は、何度も上海熱線〔訳註：インターネットサービスプロバイダ企業〕を攻撃して、しかもキレにキレた機転で他人のアカウントを盗み、インターネット上を飛び回ったからだ」⁽¹⁸⁾と才能の高さを示すエピソードも添えられ、その後の再会では起業したことも読者に知らされる。阿 Dick については「見たところなんだかまだ 18 歳にもなっていないさそうな様子だった。しかし上海では少々有名な前衛画家で、コミック風キャラクターも上手に描ける」⁽¹⁹⁾と、非常に若くして成功しつつある芸術家であることが説明され、飛苹果は「北京だけでなく全国で有名なスタイリストだった。グリーンカードを持って世界中を飛び回り、美のインスピレーションと最新トレンドをキャッチしているという。国内のあらゆる女性スターたちはみんな、彼にスタイリングを頼めたらラッキーだと思っているそうだ」⁽²⁰⁾と全国レベルの有名人がることが評判とともに示されている。さらに朱砂は「彼女は誰にも頼ろうとしない。彼女は良い仕事に就き聡明な頭脳を持ち、この都市の中で新世代を代表する、精神的にも物質的にも自立している高等教育を受けた女性なのだ」⁽²¹⁾とあるように、成功した上海のエリート女性である。

彼らはいずれも若い世代の人物であり、若くして富や名声を得ることは夢物語ではない、才能さえあれば必ず積極的に評価され、努力は報われ成果になる、といったメリトクラシー（能力主義）の世界に Coco が生きていることが分かる。最も象徴的なキャラクターは、天天の小学校時代の同級生で、Coco も天天を介して知り合い友人となる、マドンナという女性である。経済力のある外国人や富裕層だけが出入りする店やホテルを日常的に利用し、高級ブランド品を身につけ高級車を乗り回す彼女は実は貧困層の出身で、家族に虐待されて出奔したが、自身の美貌と胆力を利用して成功し、さらに富豪と結婚して遺産相続した経緯がある。非エリートであり、芸術などの「才能」も持たないながら、独力で資産を手に入れ豊かな生活を謳歌するマドンナの半生は「素晴らしきマドンナ（了不起的马当娜）」というタイトルの節の半分ほどを割いて語られている。Coco が生きるメリトクラシー世界における「素晴らしき」例でもあり、Coco や阿 Dick のような芸術の世界とは異なる評価軸、すなわち市場競争における勝利者として、新自由主義に接続するキャラクターでもある。

しかし、彼ら華々しい能力を持った友人を持つ一方で、Coco と天天はそれぞれ文章と絵画という自身の才能を自覚しつつも、いずれも収入に結びつかない状況に置かれていることに留意すべきである。二人は経済的な不自由こそないものの、自立という点では周囲の友人たちから後れをとっている。彼らのような高等遊民的生活は、ほかの晩世代作家の作品にも見られる設定で、登場人物たちの反逆性を損なう要素として批判されてもいる⁽²²⁾。ただし、少なくとも Coco はその状況に満足しているわけではない。それは、Coco が自分の母親から母性愛を感じ取った際の心情から読み取れる。

母の目には母性愛が満ちていた。こういうものこそ、私をあたためると同時に倍もストレスを与えるのだ。母性という子宮の中に飛び込んで、成長後に得た不安や悲しみをアイロンがけしてしまいたくさせるし、母性愛が築き上げた大きな広場からさっさと逃げ出したくもさせる⁽²³⁾。

Coco にとって母親の母性愛に浸ることとは、自分を庇護し不安を取り除いてくれると同時に、管理と制御をほどこされる檻でもある。とはいえ、ここに見えるのは自由と孤独／束縛と庇護の間で迷うといった楽観的な心情ではなく、安定した自立状態を獲得できていない成人独特の焦慮にほかならない。

さらには、Coco の友人の内とりわけ順調に人生を前進させているように描かれる朱砂と阿 Dick のカップルが、Coco と天天の状況と多くの共通点を有すると同時に、先をいく存在であることにも注意すべきだろう。Coco と朱砂はいずれも文系の有名大学を卒業しているが、安定していた雑誌記者の職を辞めた後、いまだ新作小説を発表する目処の立たない Coco に対し、朱砂は手堅く外資系企業のホワイトカラー職に就いている。そして、若くして前衛画家として名を挙げつつある阿 Dick に対し、天天はあくまでも趣味の範囲で絵を描いているにすぎない。また、Coco が浮気相手を持ち、天天との関係が壊れついには失う一方で、朱砂と阿 Dick は順調に関係を深めていき、天天の死後に結婚式を挙げる。Coco と天天は、若者の経済的自立、そして恋愛関係の「健全な結実」としての法律婚のいずれの社会規範からも外れた存在となっているのだ。

Coco と天天はメリトクラシーの世界観の下で、『ラ・ボエーム』（Coco は子どもの頃、教養

として父親にこのオペラを鑑賞させられたとされている)の登場人物のような貧窮にこそ見舞われないものの、能力の成果としての安定した経済基盤を持たないことで、メリトクラシー世界においては欠如体である。そこから生じる抑圧感は、しばしば二人が互いに励まし合うことで紛らわされている。天天は Coco が書いた文章を読んだ後、「大好きな Coco、君はできる人だって前に言ったよね。君はほかの人とは違う。君はペンで身の回りのことよりもっと真実味のある、もう一つの世界を創造することができる」⁽²⁴⁾と、新作をまだ書き上げられない駆け出しの作家に自信を与える言葉をかけるし、Coco は作ったアート下着が売れて喜ぶ天天に、「そうだよ、あなたはすごい人なんだよ。その気になれば沢山のことをやり遂げられるんだからね」⁽²⁵⁾と、将来の広い可能性を保証してみせるなど、両者は互いの才能を誰よりも信じて賛辞を惜しまない。メリトクラシーの世界観に満ちた叙事の中で、他方 Coco と天天の姿から見出せるのはむしろ、未だ自己実現のかなわない者たちが自信を与え合い、支え合う姿である。

このような主人公の世界観と現実の衝突は、フェミニズムに対する態度においても見られる。まず、Coco のジェンダー観はほかの「身体写作」作品とともに、ポストフェミニズム現象の例として、しばしば批判の対象となってきた。林樹明は、上の世代の女性作家の作品と比較してより道徳に挑戦的ではあるにせよ、男女の登場人物に付されたジェンダーが伝統的なものにすぎないと指摘し、エレヌ・シクスの理論を引き合いにテキストの有限性を次のように説明した。

シクスの「身体エクリチュール」論が主に強調しているのは女性同士の愛情である。それは家父長制文化の排斥と批判を強調するものであり、濃厚なイデオロギー傾向を持つ。衛慧やとりわけ棉棉などの多くの作品では、主人公が社会にも性にも不真面目な、軽薄さとネガティブさが表現されており、性の空間或いは生理的欲望の空間が無限に誇張されている。問題なのは、これらの現象を書くことができない、という点にはない。重要なのは、作者が鑑賞者の立場からそれらを並べ立てていること、そして往々にして人物のジェンダーコードが男女ともに伝統的なものであり、その女体「消費」の傾向は比較的顕著であることだ(女性を性的な存在としてのみ扱うのは、男性中心主義の習わしである)⁽²⁶⁾。

シクスーが主張したのは、男性作家のテキストにおける女性客体化への抵抗ならびに抑圧からの解放を目指すエクリチュールの実践である。その文脈において、女性作家が女性の身体を秘密めいたものにせず、必要に応じて詳らかにし、自身の性欲や性行為さえも堂々とさらけ出すテキストは、女性の身体を女性本人に取り戻すという意味で、フェミニズム文学の常套ですらある。2000年代に入ってから中国国内でも上演されたイヴ・エンスラーの『ヴァギナ・モノログ』⁽²⁷⁾などはその好例といえるだろう。『上海宝贝』では、Coco が自身の身体の美しさに誇りを持ち、露出度の高い衣服を身につけて衆目に晒し、言葉でも自身の美しさを主張する。また、欲求しだいで他人からの接触も許し、あくまでも主体的に自身の身体の使い方を決める様子が描かれている。しかし、このようなココの態度、そしてとりわけ「美女作家」のキャッチコピーとともに読者が受容した『上海宝贝』のイメージは、確かに女性の自主選択権を主張しているものの、女体の消費が受動的なものから能動的なものへと裏返ることによって、自らすすんで性的客体化を受け入れる現状追認の方向に進んでしまったように見える。これはイギリスのメディア研究者ロザリンド・ギルがまとめた「新しい女性性」に符合する。ギルによれば、第

二波フェミニズム以後、女性は性的に客体化された表象から、能動的で自ら欲望する性的主体という表象へと変化し、広告メディアにおいては「自身の性的な権力をもてあそび永遠に『その気』でいる、性的主体性を有する異性愛者の若い女性（the sexually autonomous heterosexual young woman who plays with her sexual power and is forever 'up for it'）」という姿が「新しい（ポストフェミニズム的）女性性」として提示されているという⁽²⁸⁾。また、このようなポストフェミニズム的感性は、「個人の選択」や「自己決定」の名の下に、消費主義と強く連携もする。三浦玲一は、この現象は英米に限らず日本においても90年代以降に現れた問題であり「このようなポストフェミニズムの誕生は、同時代のリベラリズムの変容・改革とかなりはつきりとながっている。それは、[……] 新自由主義の誕生であり、新自由主義の文化の蔓延である」⁽²⁹⁾と述べている。これら国外の理論が中国社会にそのまま適応できるわけではないにせよ、市場経済化以降の90年代中国においても、出版業界も含め消費主義傾向への批判が盛んに行われていたことや、様々な制度上で進行していた自由主義的改革など、共通した社会背景が多々あることは否定できないだろう。

ただし、『上海宝贝』のCocoは自身の性的客体化については決然としているわけではない。物語の後半部分、ホテルのプールへ出かけた際に次のような描写がある。

私はサングラスをとってバスタオルをめくり、赤いビキニを晒した。赤は青白い皮膚を引き立て、陽にあたるとまるで生クリームをたらした苺のフルーツサラダのようだった。急いで水の中に飛び込んだけど、ふわりとした見えない力で身体が持ち上げられた。この陽光の下では隠れる場所もない。たとえ私が目を閉じていても、他人の視線は水面を通してこの苺サラダをとらえることができる。

どうしてこんなおかしな風に、自分の気持ちが変わってしまったのだろうか。見知らぬ人が私の半裸を見る目つきは本能的な満足感を与えてくれるけど、自分がデザートよろしくバカみたいに人目に晒されていると考えた途端、潜在意識下に怒りが湧いてきて、フェミニズム思想が頭をもたげる。いったいどうして私が、何の取り柄もない頭が空っぽのバービー人形みたいに見られないといけないんだか。ああいう男たちはきっと、私が七日七晩も部屋に缶詰になっていた小説家だとは知るよしもないし、そんなこと気にもしないだろう。公共の場で見かけた通りすがりの女なんてスリーサイズを推測するのが関の山で、頭の中にどんなものがあるかなんて、ホワイトハウス前の階段が何段あるかというのと同じくらい、どうでもいいことなのだ⁽³⁰⁾。

この部分には、自身の肉体を衆目に晒し、性的な注目を集め得る「本能的に」誇るポストフェミニズム的心理が、自身が受ける注目の正体が、結局は一方的になされる性的客体化にすぎないと認識した途端に挫折する様子を読み取れる。Cocoは自覚の上ではポストフェミニズムの態度をとるが、その「潜在意識」においては、自身の態度が必ずしも社会への抵抗という形で受けとられないこと、むしろ利用されてしまうことに気づいてもいる。Cocoのポストフェミニズム的世界観もやはり、メリトクラシーの世界観と同様に、彼女の現実との衝突に見舞われているのである。『上海宝贝』の中でCocoが実践した、性規範に対するポストフェミニズム的な挑戦と、それを経た上で直感的に獲得したポストフェミニズムへの懐疑は、天天の薬物依存というより大きな悩みを前に、叙事の上ではあくまでも萌芽にとどまる。しかし、作中にいく

つか見られる通俗的で誤解も含まれたフェミニズムへの言及と比して、上記の引用部分はかなり具体的かつ感情的に突出した叙述となっている。

『上海宝貝』は、「メリトクラシー—ポストフェミニズム—新自由主義」の3つが連結した世界観を標榜しているように見えながらも、その世界に生きる Coco (たち) はけっしてそこにある理想を実現し世界観に耽溺することを許されず、理想実現に向けた希望的観測もはっきりとは示されない。むしろ「メリトクラシー—ポストフェミニズム—新自由主義」に浸る人々に囲まれながらも、それに騙されきらない鋭敏さを示しているようにも見える。次節ではこの鋭敏さがとらえた、世界観への抵抗手段について考察したい。

三、相互ケアリングによる新自由主義への抵抗

『上海宝貝』では、主人公 Coco が経済的不安なく、都市の華やかなスポットで華やかな友人たちと遊び、裕福な外国人男性と逢瀬を重ねるといった「気まま」な生活が確かに目にとまりがちである。しかし、恋人の天天とはケアする者とケアされる者の不均衡な関係にあり、Coco にとって生活の大半を占めているこの関係において、Coco の心理状態はけっして「気まま」ではなく、それが物語上の重要な要素となっている。物語自体、Coco が天天と出会い、天天を失うまでの一年間を描いており、天天と Coco の関係こそが物語の中心であることは疑いない。

天天のキャラクターは、まず冒頭で「寡黙で感傷的で、傷つきやすい。生きるということは彼にとって、一口ごとに毒におかされるヒ素をまぶしたケーキのようなものだった」⁽³¹⁾と説明されるように、Coco のキャラクターとは対称的な、精神的に脆く活力のない、やや病的な人物として描かれ、そうなった原因が彼の家族関係にあることが繰り返し示されている。とりわけ母親と父方の祖母との関係、そして死去した父親をめぐる彼女ら二人の対立が、天天の人生に影を落としていく。天天の母親康妮は、彼が子どもの頃に出奔して以降スペイン在住で、物語の前半では手紙のやりとりと送金のみに関わりしかなく、物語の終盤に上海に戻っては来るものの、天天とはたまに会うのみである。父方の祖母は、息子(天天の父親)の死が康妮の謀殺であると疑い、恨みを募らせている。すなわち、天天は母親に一度棄てられ、父親の死後は保護者として不適格な精神状態となった祖母と暮らし、適切なケアを受けることのない少年時代を過ごし、その影響を成人後に留める人物である。このような過去を持つ天天との同居生活において、Coco は天天のため、日常的なあらゆるケアを一手に担う状態に置かれているのである。

Coco は、自身の愛の在り様を以下のように独白している。

[……] 私の愛は、むしろ自分自身がどれほど必要とされるかによるのかもしれない。相手が私を必要とする度合いで、私が愛する度合いも変わる。天天は、酸素や水のように私の存在を求めている。私たちの愛はそういう、とても奇怪な形の結晶なのだ⁽³²⁾。

興味深いのは、相手は「必要とする(需要)」が、自身は「愛する(愛)」である点だ。Coco の愛は、相手から与えられる愛との相互交換ではなく、ある種一方通行の奉仕の形をとるのである。そして、Coco の愛は、言葉で愛情を伝えるのはもちろんのこと、主としてケア労働と

感情労働の奉仕という形をとって示される。その一方で、天天が Coco に同等のケア労働や感情労働を返すことはないが、Coco はそれを受け入れている。

物語の本筋にはないものの、天天が生活するための基本的な再生産労働（食事の用意や洗濯、掃除、日用品の買い物に至るまで）は、基本的に Coco によって担われていることが、作中の随所に示されている。注意すべきなのは、Coco 一人がそれら全てを担う理由が特に示されていない、すなわち両者が疑問なく性別分業に従っている点である。Coco はけっして家事が得意ではないため、裕福な天天に家政婦を雇うよう提案もしたが、他人を家に入れたくないからと却下されたとの言及もある。天天は必要に迫られてさえ家事をしないようであり、Coco が執筆に集中するあまり家事を放棄した期間は、「台所はまたもがっかりするほど空っぽで汚くなり、自分であれこれ料理する気も起きない」⁽³³⁾といった状況になっている。さらに Coco は、内気で自信がなくコミュニケーションが苦手な天天のために、様々な感情労働や対外的サポートも行う。自宅に人が訪ねてきた場合の対応は、出前の受取りであれ、戸別訪問のセールスであれ Coco が担当するし、天天の自己実現のためでもある彼の「作品」の販売も、他人に売り込む勇気が持てない天天の代わりに Coco が担うのである。病院やリハビリ施設の手配、付き添いなども Coco の「仕事」である。なお、Coco はカフェの仕事を辞めて以降も、自身の生活費・交際費は基本的に貯蓄から賄っており、天天と家事負担について取り引きした描写もない。このように Coco は性別分業を当然のように受け入れ、カフェの仕事を辞めて小説執筆に専念し始めて以降はいわば主婦に近い状態、すなわち無償のケア労働従事者となっているのだ。

しかし、Coco が担うケア労働は、Coco の作家としての活動やその方面の野心によって覆い隠されてしまい、フェミニズム批評においてもしばしば見過ごされている。80年代からフェミニズム批評に取り組み、近代文学史をフェミニズムの立場から再解釈した文学史著作『浮出歴史地表』（1989年、戴錦華と共著）で知られる孟悦と、現当代文学研究者薛毅による「女性主義与『方法』」と題された2003年の対談を例に挙げたい。中国フェミニズムの現状をテーマにしたこの対談において、孟悦は、社会的グループの所属先によって女性は異なる抑圧の環境に置かれているため、どのようなコンテクストを設定してフェミニズムを語るのかが重要である、と今日では広く知られたインターセクショナルリティ（交差性）の視点に接近した見解を述べた上で、性別分業の問題について、女性の労働（＝再生産労働）の価値をフェミニズムの立場から再解釈する重要性について、次のように語っている。

孟悦：〔……〕女性の労働が創造するのは、利潤からは遠いけれど、人生や人間と直接関係を持ったものと言えます。これこそが女性の有意義な定義であり、フェミニズムの定義だと私は考えます。このようにして、再定義は単純な男権批判を超越するのです。なぜなら、もし彼女がいかに抑圧されているのかだけに注目してしまうと、女性の労働という問題が覆い隠されてしまうからです。女性の労働の価値を掘り起こした後で、改めてこの抑圧・被抑圧の問題に目を向ければ、より有用です。このような女性の労働の定義を、『上海宝贝』のそれと比較すれば、その深浅や信憑性は自ずとはっきりするでしょう⁽³⁴⁾。

ここでは、『上海宝贝』に描かれた女性像がポストフェミニズム思想の表象と認識され、『上海宝贝』が示した「女性の労働」が作家活動のみであるかのように、Coco のケア労働が透明化されていることが分かる。これは当然ながら、衛慧の筆の下、主人公 Coco の自覚の下に知識

人的職業＝作家業が前景化され、ケア労働が後景化されているためでもあるが、『上海寶貝』からは都市部のエリート知識人女性の境遇においてもケア労働の負担が常態化しきっている、という情景を見出すこともできるのではないだろうか。

しかし、Coco が担うケア労働は、所謂「家庭の天使」——旧来の性別分業や女性規範にとどまるものではない。「メリトクラシー—ポストフェミニズム—新自由主義」の世界観の下、生に執着しない天天を生に繋ぎ止める絆を作る営為でもある。キャロル・ギリガンは、近代型家族において特に幼少期の育児が専ら母親によって行われることにより、男女のパーソナリティがジェンダー化されることを指摘したナンシー・チョドロウの研究に依拠し、著書『もうひとつの声で（原題：In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development）』（1993年）⁽³⁵⁾における研究で、女性と男性の間にある心理発達および道徳的関心の差違を、主に女性の側に着目し分析している。ギリガンによれば、女性の道徳観には男性とは異なる、他者・人間関係への配慮やケアを受け持つことへの責任感という特性があり、歴史的にその価値は低く見積もられるだけでなく、むしろ女性の弱点と見なされてきたと指摘する。ギリガンはこの道徳を「ケアの倫理」と名付けた。また、「他者とのつながりよりも、他者から分離している個人をよしとし、愛とケアの相互依存よりも、自立的な仕事の生活を志向する」という家父長制が設定した道徳観に基づき、女性は自立（＝成熟）できない存在と断じられ、裏腹に利己的であることは大罪とされたという。ギリガンは、これらが性別役割に投影され普遍化されてきた歴史を批判しつつも、「ケアの倫理」を評価し直すことの必要性を提起した。ポストフェミニストたる Coco は、その生活スタイルの上で旧来の女性規範を重視することはないが、発達過程においてはケアの倫理を獲得しているといえる。前の引用で孟悦が述べた、「女性の労働が創造するのは、利潤からは遠いけれど、人生や人間と直接関係を持ったものだと言える」との見解は、ギリガンおよび周辺の議論を踏まえたものでもあるだろう。しかし、『上海寶貝』に見られる主人公 Coco のケアの倫理は、都市文化にデコレートされたテキストが発する声にかき消され、評論においても透明化されてきたのである。

物語中盤の終わり、天天が旅先でヘロイン依存症となって以降、Coco のケア労働はそれまでの家事と感情労働を主としたケアの範疇を超え、生死の境目に迫る緊張感を帯びたものへと変化する。作中では、天天のために依存症治療施設の入所手続きを行い、入所を説得し、入所を先延ばしにした天天を再度諭し、付き添って施設まで見送るなど、天天本人に任せているのは治療不可能な状況とそれに対処する Coco の努力が示される。また退所後には「彼が治療施設から戻ってきて以来、私は家中を念入りに掃除した。午前中いっぱい、大麻やほかの怪しいものがまだ残っていないか隅々まで調べ、過去とつながる名残がないことを確認することで、自分たちの周りに安心感を築き上げるのだ」⁽³⁶⁾と、依存症患者とともに生活する者として再度のヘロイン使用に警戒しつつ生活を管理している。また同時に、天天が生き甲斐を得られるよう絵画制作を勧めるなど、Coco のケア労働は単なる家事労働以上のケアラーの要素が加わっている。もともと精神的に不安定な天天との生活の中では家事以外にも様々な感情労働が必要とされたが、そこに依存症患者のサポートが Coco の労働として加わり、Coco の役割が所謂イネイブラー（依存症患者の支え手）へと移行していることが分かる。

対称的に、ドイツ人男性マークと対する時の Coco は、天天に対する時とは対称的な姿で描かれている。Coco はマークのためには一切の感情労働をせず、マークも Coco にケア労働を求めない。また Coco は一貫して自由意志によって去りたい時にマークのもとを去ることができ、

マークもそれを当然と考えている。この点が、男性二人との関係における最も大きな差異だといえるだろう。ケアを軸として考えるならば、Cocoにとってマークとの逢瀬は、自身の肉体を代償にケア労働からしばし解放される、一種の逃避先と見ることができるだろう。しかし逃避先は逃避先にすぎず、Cocoが愛するのはやはり天天であり、彼に対するケアは愛を示す手段であるという点には注意すべきである。

なお、Cocoは天天以外の登場人物に対してもケアを惜しまない。例えば、Cocoは離婚したばかりの従姉朱砂と会って心の内を聞いてやり、恋人と別れた傷心のマドンナを自宅に泊め、やはり心の内を聞いてやる。天天の母親康妮に彼の依存症治療施設入所を伝える際も、動揺した康妮を優しく慰めているし、結末においては天天の祖母にも手を差し伸べている。また、ヒロイン依存に陥った天天を迎えにいく飛行機の中では、空港で偶然出会った飛苹果が落ち込んだCocoに寄り添うし、天天の依存症治療施設入所中には、偶来訪したマドンナが事情を知り、Cocoを家から連れ出し元気づけるなど、しばしばCocoもケアされる側にまわる。以上のように、『上海宝贝』では、Cocoとは一度会ったことがあるのみの飛苹果や初対面の康妮など、浅い付き合いでしかない間柄においても、必要に応じてケアが交わされるところに特徴がある。社会人類学者の費孝通は、中国農村社会の研究に基づき、自己を中心とした親しさの度合いによって人間関係に差と序列が生まれるという、中国社会における人間関係の特徴を「差序格局」の語で表した。中国における道德観に含まれる「ケアの倫理」を考察した論考によれば、中国における道徳的な他者への関心は、儒教文化のヒエラルキー概念の影響によってやはり「差序」のあるものとなり、ケアの倫理は個々の関係に応じた不平等な形でしか発揮されないという⁽³⁷⁾。しかし、『上海宝贝』では「差序」のない、或いは「差序」を問わないケアの倫理が発揮されているのである。

また、以上のような相互ケアリングの関係は、必要十分なコミュニケーション——主に対話と告白によるコミュニケーションを通じて強固に形成されていることも指摘しておくべきだろう。『上海宝贝』は台詞が多く、登場人物たちはそれぞれ解釈の余地がないほど真正直に自身の心情を語り、また相手の心情に耳を傾けることで、急速に互いにケアの対象となる「自己人(身内)」となっていく。鈴木将久が茅盾『子夜』に登場する上海の人々について指摘したように、コミュニケーションの危機に直面し、コミュニケーション実現に向けて「意味のずれの可能性を引き受けながら、コンテクストに依存してことばを解釈することを、コミュニケーションの宿命として引き受けたように見える」⁽³⁸⁾のとは対称的に、この小説の登場人物たちは、ストレートかつ具体的な告白によって親密さを形成する。とりわけ朱砂およびマドンナなど女性キャラクターとCocoの関係は、例えば陳染の作品における主人公と女性キャラクターとの間に見られるような、人格形成や精神的病理に影響を与えるほどの強い依存関係を築くことはないが、互いの個人的経験や悩みについて打ち明け、傾聴の態度をとることによって、即席のシスターフッドを形成している。ファビエンヌ・ブルジュールは、ケアを介した人間関係が従来のリベラル性に相対するものであることを『ケア』は、親密なことを問題にする。なぜなら、『ケア』は、ある弱さをもつ人びとの世界に、他の人びとが侵入しなければならない関係だからである⁽³⁹⁾と端的に表現している。Cocoが、天天の愛情のみで満足できないのではなく、それを天天に隠していることに深い自責の念を持つのは、秘密を持つことや偽りを話すことが、親密さの形成を阻む要素となるからかもしれない。

ギリガンのケアの倫理は、キャサリン・マッキノンをはじめとするラディカル(根源的)・フェ

ミニストによって、家父長制的社会構造によってジェンダー化された特性を肯定し、抑圧者側の要求に応える態度を再生産するものとして批判された。岡野八代は、ケアの倫理に対するフェミニストたちの躊躇は、政治思想の領域における既存の公私二元論の無批判な受容に基づいているとし、「近代以降の私的領域は、自由意志をもち、自由に善を構想し、他者や外界への依存は自由を阻害すると考える主体（＝公的領域では市民とみなされる者）が存在する領域であり、依存者とそのニーズをケアする者は自然視され、脱政治化され、リベラルな公私二元論においては、その議論の射程からそもそも排除され、忘却されてきた」⁽⁴⁰⁾と指摘する。ギリガンの理論は、けっして女性の道徳性を母性と結びつけ、性別役割を肯定し規範化しようとするものではない。従来のリベラリズムが個人を自律したものと措定し、人間が生きていく上で避けられない相互依存の関係がその理論に組み込まれてこなかったことを指摘するものであって、ケア労働負担の偏りを正すべきとするフェミニストの主張と矛盾しない。岡野は「社会を構成する主体がそのような者〔＝他者のために行為する社会的役割から切り離された自律的主体〕として規定されてしまうことは、そもそもリベラリズムが目指す価値多元的な社会、異なる他者との共生を可能にする社会に向かうはずの構想を裏切ることになる」⁽⁴¹⁾とも指摘している。『上海寶貝』の登場人物たちには、相互依存の関係を否定する態度も見られず、ことさらにケアの重要性を主張し他者への配慮や相互依存が「人情」の演出となることもない。彼らの相互ケアリングは、登場人物たちの交際・交流の現場という形でさりげなく物語の中に編み込まれており、そこに表れているのは、独立自主を旨とするリベラル性とは対称的な、ケアし合う人間同士の姿にほかならない。そして、人生におけるケアの価値を肯定し人間の依存関係を肯定することは、新自由主義社会が提示する、あらゆる個の自主独立を前提とした社会規範や社会制度に抗することに等しい。

『上海寶貝』は、天天の母親のもとへ孫の死の責任を問うためやってきたが追い返されてしまった天天の祖母を、ココが自宅まで送ろうと申し出る場面で結末を迎える。天天の祖母に誰何されたココは即答できず、「私は誰？」と自問自答している。この時、ココの作家業は順調に進展しているのだが、天天を亡くして以降、それまでケアし合っていた友人たちとの関係が稀薄になっている状況にある。ココのアイデンティティの所在は、実のところ作中で繰り返し主張される作家という職や創作の能力ではなく、ケアで繋ぎ合わされた人間関係にあったことが、この自問自答に示されているのではないかと。

結び

『上海寶貝』は女性文学としては典型的なポストフェミニズムのテキストと名指され、テキストの審美性もほとんど問題にされず、政治性においては専ら消費主義との関連が議題の中心とされてきた。無論、1990年代から2000年代初頭における当代中国の文化コンテクストにおいて、『上海寶貝』の宣伝手法に見られた文学商品化や流行作家のアイコン化が、突出した新現象だったのは事実である。今日ではけっして珍しい状況ではなくなったものの、この作品の受容が文学の通俗化／低俗化という問題に回収されてしまったことは、逃れられぬ宿命でもあっただろう。しかし、そもそも本来はテキストの外部にすぎないマーケティング、すなわち「美女作家」というキャッチコピーならびに作家のメディア露出のあり方がもたらした受容状況が物語の性格までも規定し、批評にさえ影響を与えてきた側面は否めないだろう。

『上海宝贝』の登場人物間の交流からは、人間同士が交わす配慮、言い換えればケアによる有機的なつながりが見えてくる。とりわけ、主人公 Coco のケアの倫理は強固なものである。それは、ほかでもなく語り手である主人公が「メリトクラシー—ポストフェミニズム—新自由主義」の世界観を内面化し、かつその理想をつかめていない状態にあるからこそ、ある種の違和感として浮かび上がり、同時にますます個人主義化していく社会への抵抗を示す手段としても浮かび上がるのである。衛慧本人が語ったように、『上海宝贝』が描くのは一面においては上海のモダンで西洋化・資本主義化した都市生活である。しかし、登場人物たちのような経済的に恵まれた人々でさえ、なお他者への依存が必要である現実が、そうした都市部の生活模様と並走する形で書き込まれていることを無視してはならないだろう。「個」を称賛し、独立や自主性の価値を重んじるある種ドライでクールな世界観を理解しつつも、理想の外側の世界も察知している、当時の「新・新世代」のウェットでアンビヴァレントな生の在り様にこそ、当時の上海が活写されているといえるのではないだろうか。

本稿は、紙幅の問題もあり、作者の衛慧を考察対象にしなかったため、本来であれば視野に入れるべき続編『我的禅』や、衛慧のその他の作品を含めた考察に至らず、あくまでも一作を対象とした分析となった。また、中国における「ケアの倫理」の研究は主として心理学および倫理学の領域で展開されており、「ケアの倫理」の視点から中国文学を論じた例が現時点ではほとんどなかったため、主として欧米・日本の参考文献を根拠とせざるを得なかった。今後は「私的領域」の描出を特徴とする改革開放以後の文学について、衛慧以外の作家も検討の対象に加え、中国当代文学における農村・都市の「ケア」の諸相について掘り下げていきたい。さらにこれによって、欧米・日本と同様、やはり男性（知識人）主体の言説であることを免れずにきた中国現当代文学史ならびに文学批評に、新たな視点を提示できるのではないかと考える。なお、本稿の執筆にあたり、欧米のフェミニズム理論については大部分を邦訳書に頼っている。これについては今後の課題としたい。

【註】

- (1) 香港版の表紙にはタイトルのすぐ下に「衛慧私小説」との説明が付されている。なお、中国大陸版の入手が困難であったため、本稿執筆の文献には引用部分の底本も含め香港版（天地圖書、2001年出版）を使用した。
- (2) 許翠微「村上春樹の『ノルウェイの森』と衛慧の『上海ベイビー』の比較考察」、『平安女学院大学研究年報』第18号、2018年、116頁。
- (3) ポストフェミニズムは、「フェミニズムは終わった（ジェンダー平等は達成された）」との認識に相対する認識、すなわちフェミニズムの継続の必要性を強調する意味において「ポスト」を付す場合もあるが、本稿では第二波フェミニズム後に興った前者の認識に基づく思想として「ポストフェミニズム」を使用する。
- (4) 劉伝霞「女性・身体・政治——從三部小説文本看建構女性自主性身体叙事的艱難歷程」、『貴州社会科学』2003年第6期、76-80頁。
- (5) 「女性意識」はもともと「ジェンダー意識 (gender consciousness)」の漢訳語であったが、このほかに「社会性別意識」「性別意識」の訳語があり、現状では区別なく使用されている。本稿で使用される「女性意識」は、王政『『女性意識』と『社会性別意識』——現代中国フェミニズム思想の一分析』（秋山洋子訳、小浜正子・秋山洋子編『現代中国のジェンダー・ポリティクス：格差・性売買・慰安婦』、勉誠出版、2016年）を参考に、「ジェンダー意識」の直接的な訳語としてではなく、80年代以降に中国で「男も女も同じ」言説を解体し、女性の自律と自我を認める意義で構築された言説の「女性意識」の意味で使用している。

- (6) 中国におけるフェミニズム批評がエレヌ・シクスー『メデューサの笑い(原題: Le Rire de la Méduse)』に言及する際、張京媛主編『当代女性主義文学批評』(北京大学出版社、1989年)に掲載された中国語訳が参考文献として挙げられることが多い。
- (7) 向栄「戳破鏡像——女性文学の身体写作及其文化想象」、『西南民族学院学报・哲学社会科学版』2003年第3期、188-199頁。
- (8) 徐岱「另類叙事:論『新生代』小説三家」、『南方文壇』2002年第5期、35-39頁。
- (9) 馬春華「刀刃上的舞蹈——評衛慧『上海宝贝』兼及晚生代女作家創作」、『小説評論』2000年第3期、28-34頁。
- (10) 倪偉「論『七十年代後』的城市『另類』写作」、『文学評論』2003年第2期、52-61頁。
- (11) 蔣濟永「身体消費的文化隱喻——衛慧『上海宝贝』的文化解讀」、『名作欣賞』2006年第5期、108-111頁。
- (12) リービ英雄「書評:上海ベイビー エロスの表現に『淋しさ』漂う」、朝日新聞2001年5月6日。
- (13) 徳間佳信「『上海宝贝』、あるいは自己愛の万華鏡」、『中国当代文学研究会会報』第16号、2002年、43-50頁。
- (14) 張競「彷徨う魂の叫びは都会の荒野に木霊する」、『文學界』2001年5月号、316-317頁。
- (15) 衛慧『上海宝贝』、天地圖書、2001年、4頁。
- (16) 前掲『上海宝贝』、4頁。
- (17) 前掲『上海宝贝』、5頁。
- (18) 前掲『上海宝贝』、12頁。
- (19) 前掲『上海宝贝』、34頁。
- (20) 前掲『上海宝贝』、121頁。
- (21) 前掲『上海宝贝』、144頁。
- (22) 董麗敏「墜落的飛翔——評所謂『七十年代出生的小説家群』」、『上海社会科学院學術季刊』2000年第4期、145-146頁。
- (23) 前掲『上海宝贝』、147頁。
- (24) 前掲『上海宝贝』、30頁。
- (25) 前掲『上海宝贝』、54頁。
- (26) 林樹明「関于『身体書写』」、『文芸争鳴』2004年第5期、80頁。
- (27) アメリカの劇作家で俳優のイヴ・エンスラーが200人以上の女性に自身の女性器について語ってもらい、それを再構成して一人芝居に仕立てた1996年の戯曲で、書籍化された脚本は邦訳(『ヴァギナ・モノローク』岸本佐知子訳、白水社刊、2002年)も出版されている。なお、原題は"The Vagina Monologues"と複数形である。
- (28) Rosalind Gill, "Postfeminist media culture: Elements of a sensibility", *European Journal of Cultural Studies*, Vol 10 no.2(2007): 151.
- (29) 三浦玲一「ポストフェミニズムと第三波フェミニズムの可能性——『プリキュア』、『タイタニック』、AKB48」、(三浦玲一・早坂静編著『ジェンダーと「自由」:理論、リベラリズム、クィア』、彩流社、2013年)、64頁。
- (30) 前掲『上海宝贝』、193頁。
- (31) 前掲『上海宝贝』、5頁。
- (32) 前掲『上海宝贝』、79頁。
- (33) 前掲『上海宝贝』、254頁。
- (34) 孟悦・薛毅「女性主義与『方法』、『天涯』2003年第6期、47-48頁。
- (35) 邦訳書に、岩男寿美子監訳、生田久美子・並木美智子訳『もうひとつの声:男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』(川島書店、1986年)および川本隆史・山辺恵理子・米典子訳『もうひとつの声で——心理学の理論とケアの倫理』(風行社、2022年)がある。本稿は後者の邦訳書を参考としている。
- (36) 前掲『上海宝贝』、230頁。
- (37) 張亜麗「吉利根の関懐倫理与我国道徳関懐の差序存在」、『学理論』2017年第4期、68-69頁。
- (38) 鈴木将久『上海モダニズム』、中国文庫、2012年、40頁。
- (39) ファビエンヌ・ブルジュール(原山哲・山下りえ子訳)『ケアの倫理——ネオリベラリズムへの反論』、白水社、

2014年、2023年第9刷、105頁。

(40) 岡野八代『フェミニズムの政治学』、みすず書房、2012年、2023年第8刷、167-168頁。

(41) 前掲『フェミニズムの政治学』、172頁。